

## 翻訳：

### 14 世紀イスラームの医学観：

#### 『医学と医者が必要であることの証明』翻訳 (3)

#### Image of Medicine in 14th-Century Islam:

#### Japanese Translation of *Bayān al-ḥāja ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā'* (3)

矢口 直英

Naohide YAGUCHI

## I. はじめに

本稿は、クトゥブッディーン・シーラーズィー (Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī, 1236–1311 年) による医療倫理書『医学と医者が必要であることの証明』(*Bayān al-ḥāja ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā'*, 以下『証明』) の翻訳である<sup>(1)</sup>。今回は、シーラーズィーが引用する他の医学者による助言のうち、サーイド・イブン・ハサン (Ṣā'id ibn al-Ḥasan, 11 世紀) の『医学への欲求の喚起』(*al-Tashwīq al-ṭibbī*, 464 年 [=1072 年] 執筆)<sup>(2)</sup>およびイブン・フバル (Ibn Hubal al-Baghdādī, 1213 年没) の『医学選集』(*al-Mukhtārāt fī al-ṭibb*)<sup>(3)</sup>から引用された箇所 (校訂版 35 頁から 45 頁まで) を訳出する。

前回述べた通り、『証明』は同著者がイブン・スィーナー (1037 年没) の『医学典範』(*al-Qānūn fī al-ṭibb*) に対して執筆した注釈書 (以下『注釈』) の記述が再編されたものである<sup>(4)</sup>。今回以降に翻訳する部分の元となった箇所は、『医学典範』第 1 巻第 4 部 (Fann 4) に当たる『注釈』第 4 部の末尾にある。シーラーズィーは『医学典範』第 1 巻第 4 部の最後の文章<sup>(5)</sup>を引用した後で、「我々は大師 [イブン・スィーナー] に倣い、注釈を助言で締めよう。大師が本文を助言で締めているように」と述べて、サーイド・イブン・ハサンやイブン・フバルの助言を引用している<sup>(6)</sup>。なお、『注釈』はその後も同様の引用やシーラーズィー自身による助言など『証明』に相当する文章が続き、それが終わると『注釈』自体の結語が来る。

本翻訳の底本として、Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī, *Bayān al-ḥāja ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā', wa-ādāb-hum wa-waṣāyā-hum*, ed. A. F. al-Mazīdī, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2003 を使用した。また翻訳で参照する文

<sup>(1)</sup> 既刊の翻訳のうち(1)は『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 49 号 (2018), 235–249 頁に、(2)は同誌第 51 号 (2020), 287–304 頁に掲載。

<sup>(2)</sup> Ibn Abī Uṣaybi'a, *ʿUyūn al-anbā'*, I, 253; Ullmann, *Die Medizin*, 225.

<sup>(3)</sup> Ibn Abī Uṣaybi'a, *ʿUyūn al-anbā'*, I, 306; Ullmann, *Die Medizin*, 161f.

<sup>(4)</sup> 矢口「14 世紀イスラームの医学観(2)」287 頁。

<sup>(5)</sup> Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, 334.

<sup>(6)</sup> Istanbul, Şehid Ali Paşa, 2050, 258r.

献として、以下のものを挙げる。

- ・ Ibn Abī Uṣaybi‘a. 1882: *‘Uyūn al-anbā’ fī ṭabaqāt al-aṭibbā’*, ed. A. Müller, 2vols., Cairo: al-Maṭba‘a al-Wahbīya.
- ・ Ibn Hubal al-Baghdādī. 1943–45: *Kitāb al-Mukhtārāt*, 4vols., Haydarabad: Jam‘iyat Dā’irat al-Ma‘ārif al-‘Uthmānīya bi-‘Āṣimat al-Dawla al-Āṣifiya.
- ・ Ibn Sīnā. 1981: *Al-Qānūn fī al-ṭibb*, vol. 1, New Delhi: Institute of History of Medicine and Medical Research.
- ・ Kühn, C. G. 1821–33: *Claudii Galeni opera omnia*, 20vols., Leipzig: Cnoblochii.
- ・ Littré, É. 1839–61: *Œuvres complètes d’Hippocrate*, 10vols., Paris: J. B. Baillière.
- ・ Ṣā‘id ibn al-Ḥasan. 1968: *Das Buch At-Taṣwīq aṭ-ṭibbī des Ṣā‘id ibn al-Ḥasan: Ein arabisches Adab-Werk über die Bildung des Arztes*, ed. O. Spies, Bonn: Selbstverlag des Orientalistischen Seminars der Universität Bonn.
- ・ Taschkandi, S. E. 1968: *Übersetzung und Bearbeitung des Kitāb at-Taṣwīq aṭ-ṭibbī des Ṣā‘id ibn al-Ḥasan: Ein medizinisches Adabwerk aus dem 11. Jahrhundert*, Bonn: Selbstverlag des Orientalischen Seminars der Universität Bonn.
- ・ Ullmann, M. 1970: *Die Medizin im Islam*, Leiden: E. J. Brill.

両著作からの引用が長大であるため、段落終わりで引用が終わっていない場合は鉤括弧を段落末に記載しない。ただし、引用元の原典で章の切り替えに当たる箇所では鉤括弧を閉じ、対応する参照箇所を記す。

## II. 翻訳

35

医者 of 助言 of 証明について

ご主人たるアッラーマ [シーラーズィー] 曰く。我々は助言に関して、大師 [イブン・スィーナー] に倣うとしよう。そのうちには、医師サーイド・イブン・ハサン (Ṣā‘id ibn al-Ḥasan, 11世紀) が『医学への欲求の喚起』 (*al-Taṣhwīq al-ṭibbī*) で述べたことがある。

「医者 of 属性 (ṣifāt) には [次のものがあるべきで] ある。混質において平衡で、魂が純粹で、信仰が固く、法を遵守し、知性に富み、知能が強く、想像力が良く、正直な言葉と実現される信用で知られ、関心をもつことに注意深く、善を生み出すことを好み、美しい行為において内心と外面が等しく、性格が良く、金を稼ぐ者に悪意をもたず、財産を妬まず、先立つ伝記と情報に習い、文字と言葉遣いが正しく、先人たちの学問の勉強と読書と考察に努め、言葉が柔らかく優しく、弱者や貧者に慈悲深く、彼らの治療を富者の治療に優先させ、ヒポクラテスとガレノスの著作、またそれらの理解において彼らと同一の見解をもつ者の著作の収集を重視し、それらの難解な箇所の研究とその学派の記憶を重視し、その学術における技巧と有能が学問の徒に知れ渡り、彼の先生と師匠が知られていて、それに加えて彼らの知識と美德が彼自身に現れるほど彼らとの関係が正しく、問われたことを知っていれば答え、知らないことは考察し研究するまで保留にしておき、[知識 of] 増大を厭わず、熱望と努力に飽くことなく、驚愕せず、傲らず、過去を記憶し、現在を熟知し、彼が治療する病人にいずれ起こる状態を予知し、

薬剤師として活動し、四肢と腹と陰部が純潔で、秘密を守り、冗談や悪戯が少なく、飲酒に誘われず、罪に溺れず、病人に尽くして奉仕し、病院に行く習慣と配慮が多く、医学の原則の考察が多く、論理の術の訓練が多く、数学諸学の学習が多く、それに献身し努力し、読書や読解を熱望し、気が長く、疲れず、苛立たず、これ以外のことに心を没頭させず、これ以外のものに快楽を覚え、獲得されたものは何も彼にとってその代わりとはならず、彼の寿命の時間を可能な限りそれ以外に費やさない。

36 「それに加えて、神による成功を必要とする。これらを自身の属性とする者は<sup>(7)</sup>、神が助けの手を差し伸べ、成功で支えてくださり、偉大さと威厳を備えた視線で見てくださる。また神は彼を、捏造し誤ったソフィストたちに勝たせてくださる。このような医者が見つかったなら、彼は病人の治療において信じ頼るべき人である。その後で、私が述べる条件と原則に従わなければならない。」<sup>(8)</sup>

「それはまず、我々が述べた属性の全てか、その大部分が完璧に彼に備わることである。彼はそれについて完璧になることを熱望し、論理の術の原則を理解するよう努力する。そして、病気の本性を区分して薬品を導き出し、その性質——つまり四元素——を病気の性質から、その量を元素の量から導き出し、病気の原因を区別して導き出し、薬品の力をその影響とそれに附随する附帯性から得られた類推によって見出せるようにする。また解剖の術への精通と論理の術における能力に従って、明らかなものつまり病気からの類推によって隠れたものつまり治療を正しく証明し、病気の排除に適した治療を導き出すことでその学術を完成するために、類推と経験を併せ持つ。これらの原則を遵守し、この道を辿り、無知な医者とかけ離れた者は、医者と呼ばれるに相応しい者である。

「その後で、算術のうち、乗法と除法と比を知ら [ねばならない]。ただし、その正確さを追求して、必要でないものに時間を費やさないように。算術による利益は、病人への食べ物と飲み物と薬品の量を、共同体によって異なる重量や体積の度量衡やそれらの互いの関係を知ってから計算するためである。また、正しい数の知識をもって、初期、増大期、絶頂期、鎮静期という病気の時期を知るための時間数や日数を数えることにより、病気の発作の時間と小康の時間の量を、分利の日を、その他算術なしでは知ることができないものを知るためである。

37 「また占星術のうち必要なもの、例えば大地の形についての知識や、それが天球の中心に位置すること、その気候帯の区分、街々、国々の経度と緯度、つまり西の方角からの距離と赤道からの距離を知ら [ねばならない]。また地上での元素 (uṣṭuqussāt) ——つまり四元素 (‘anāṣir)<sup>(9)</sup>——の構成、天球の順序と運動、星々の状態、それらの数年間の、数ヶ月間の、数日間の、数時間の運動、それらの黄道での滞在、連結 (qirānāt) と合 (ittiṣāl)<sup>(10)</sup>、それらの太陽からの遠

<sup>(7)</sup> サイドの本文に従い、「ṣan‘at-hu」を「ṣifat-hu」に修正して読む (Ṣā‘id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, 12b, l. 12)。

<sup>(8)</sup> Ṣā‘id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, ch. 3, 11b, l. 5–13a, l. 3.

<sup>(9)</sup> 「uṣṭuqussāt」と「‘anāṣir」は共にギリシア哲学的な四元素の訳語であり、特に前者は「στοιχεῖον」の音写である。

<sup>(10)</sup> 類義の2語を連結および合と訳したが、同一の内容を意図していると思われる。

さと近さ、太陽暦の月と太陰暦の月の初め、太陽が黄道に滞在することで時の暑さと寒さが変化することを知ら [ねばならない]。また、太陽と月の昇りと沈み、天における正中、現在の季節とその本性、日々における昼と夜の時間の長さの違いとその量、月の黄道上の位置とその光を知ら [ねばならない]。特に、急性の病気の初期とそれらの [病気の] うちのある時間において、完全なものと不完全なもの、良いものと悪いものといった分利を正しく判断するためである。それに精通し、必要な量を把握し、過ぎ去った徴候、現在の [徴候]、予告される [徴候] によって病人を正しく判断すれば<sup>(11)</sup>、[病人に] 平静が訪れ、[病人の] 魂は彼の言葉を受けて回復し、彼が治療する人への治療と、彼が [治療から] 逃げる人を逃げる理屈は正しくなる。傑出したヒポクラテスは言った。『星々の知識は医の学問 (‘ilm al-ṭibb) の小さからぬ部分である。』<sup>(12)</sup>

「また幾何学のうち<sup>(13)</sup>、円形の潰瘍は肉がそこに成長しにくいために癒合が遅いこと、鋭角をもつ [潰瘍] は肉が成長するのが鈍角をもつものより早いことを知ら [ねばならない]。太陽光線と視覚光線は直線であることを知らねばならない。太陽光線は輝くが熱くない物体つまり太陽から発せられるのに、空気をどのように温めるのかを知るべきである。認識者つまり視る者がそれを認識する際に、視覚光線から円錐の形をしたもの——その頭は水晶体の中心に、その底は視られる物体の限界、視覚光線が触れて囲むところにある——が描かれて、視られるものはこの円錐によって水晶体の中に生み出される角度の大きさによって見られること、したがってこれが小さいと見え方は小さく、これが大きいと見え方は大きくなること、これらが物体の大きさとその形の認識を引き起こすことを知る [べきである]。

「また音楽のうち、鼓動や拍子、鼓動と静止の時間の比や秩序、秩序の違い、それに類するものを知ら [ねばならない]。また音調と声色の違いを知り、広い声、重い声、しわがれ声、細い声、中庸の声を区別し、指先を訓練して、弦に触れ [ねばならない]。というのも、それは脈拍の知識に非常に役立つからである。ガレノスが自身の著作を読む順番について語る書物において語った言葉の一節をその証言としよう。彼は哲学と医術について述べたとき、『これら 2 つの学術に共に熟達することを志す者は、賢く、理解力があり、記憶力が良く、激しい熱意をもち、苦勞を耐えそれを好むべきである。また、私が幼いころから父のもとで幾何学や算術学を習って受けた幸運を彼も受けるべきである。というのも、私が 15 歳になるまで、彼は私を自由人が習うような他の教養や訓練に導いてくれた。そして私を論理学の学習に導き、私が哲学のみを学習するように意図した。しかし、夢を見たことで彼は医学の学習に誘われ、私を医学の

38

<sup>(11)</sup> サイドの本文に従い、「ṣahḥa」を「wa-ṣahḥa」に修正して読む (Sā'id ibn al-Hasan, *al-Tašwīq al-ṭibbī*, 14b, l. 11)。

<sup>(12)</sup> 『空気、水、場所について』第 2 節 (Littré, II, 14)。

<sup>(13)</sup> サイド・イブン・ハサンの原文では幾何学についての記述の冒頭に、『証明』および『注釈』における引用にない数行の記述がある。参考のためここに訳す。「また幾何学のうち、点、線、面、立体の意味を知り、種々の線や角度、それらの位置の相違、種々の面や立体、それらの形、またそれらに充てられた名前と、それらの特性について少しのことを知らねばならない。ただし、人生は短く医術は長いため、それらの考察をし過ぎることがないように。」(Sā'id ibn al-Hasan, *al-Tašwīq al-ṭibbī*, 15a, ll. 1-7)

学習に導いた。そのとき私は 17 歳になっていた。彼は私に、医学の学習とともに、私が始めていた哲学の学習を続けるよう命じた。もし私が人生の全てをかけて医学と哲学の内容に献身しなければ、それらの何れも大して知ることがなかったであろう。私が父について述べたような私が受けた幸運にもかかわらず。また、学んでいたことの学習において私と共に学んだ者の誰よりも先行していたにもかかわらず。』<sup>(14)</sup>これは、医術の学習を望む者が必要によって論理学と全ての数学的学問の学習へ誘われるということを示す、この賢者の言葉からの明白な証拠である。

「医者はそれらの知識の後で必ず、不可欠な原則を知る必要がある。そのうちには、医学の学派とその各学派の信条を知ること、何が類推学派の信条を訂正できるのか、どのような非難を彼らが他の「学派」へ向けたのかを知ること、元素の構成と変化、自然物体のそれらからの構成、その混合の違いを知ること、諸器官について、それらの性質 (khilqa) と解剖と数と大きさと位置と用途の見識をもつこと、体液とその混合、それらから何が、何時、何処で生まれるのか、それらの生成における用途は何か、それらの種類がどれほどか、それらのうち自然なものとは何か、偶発的なものは何か、それらに宿る力およびそれらの統御を任された精気は何か、それらから発する機能は何かを知ること、それらのうち自然要素と自然でない必然的要素、それらの本性、それらが然るべく運用されたときとそうでない運用をされたときに各々から生じること、これらのものが健康と病気をどのように維持する、あるいは生じるかを知ることがある。

「また病気とそれらの区分、それらの種の違い、それらの原因、それらを示す徴候、それらのうち安全なものとは破滅的なもの、それらのうち治癒可能なものとは不可能なものについて知って見識をもち、分利とその日々を知り、脈拍と尿とそれに続くことを知って予後に精通し<sup>(15)</sup>、直観に優れて、病気の種を証明する方法に見識をもち、必要なことについて良く質問でき、必要でないことについて質問を避け、健康の維持と病気の治療において急がず優しく、薬品の力とそれらの効用、それらの全ての作用、それらやそれらの複合に関すること、複合の後でそれらに生じる混質や力や人間の身体への影響を導き出すための類推の方法を知り、旅行と引っ越しが多く、学問を研究し、優れた人々との出会いを求め、先人たる賢者たちの書物のうち必要なものを多く読んで多く質問し、それらの収集と獲得に激しい熱意をもつ。それらが所有されれば、それらを読んで理解し勤勉に執着しようとする熱意は、それを求め所有しようとする熱意より激しくなる。というのも、書物を所有する目的は理解であり、知識の蓄積の「目的」は学習だからである。さもないと、その所有者は『本を運ぶロバ』<sup>(16)</sup>となろう。また、疲労や苦勞、熱意や努力、勉強や読書のための夜更かし、学習したことの繰り返しの重荷に悩まされず、読んで理解したことは忘れないなどと思い込んで記憶を信頼し過ぎることがない。忘却は

<sup>(14)</sup> 『自身の書物について』 (*De ordine librorum suorum*), Kühn, XIX, 58–60.

<sup>(15)</sup> サードの本文に従い、「mā fī taqaddumi-hi」を「māhiran fī taqdimat」に修正して読む (Sā'id ibn al-Ḥasan, *al-Tašwīq al-ṭibbī*, 17b, l. 3)。

<sup>(16)</sup> クルアーン第 62 章 5 節。

全ての人間に起こるのだから。

「旅行の途中では、国々の混質の違い、自然な空気や偶発的な空気を知ることに関心を向け、場所ごとに特有の動物や植物、海や山や川、場所ごとの混質、そこの人々の性格や習慣、彼らの空気、食べ物や飲み物、仕事、季節ごとに繰り返される病気がどのようなものか、彼らが病人を何によって治療するのかを知り、彼らが成功するか失敗するかを試す。そして、彼らの失敗は彼ら自身によるか、彼らの医者によるかを考察し、これら全てのことの原因を調査し研究し、それらに応じて行動し、しかしそれに満足せず、先人たる医者たちの発言を証言とすべきである。それと矛盾があれば、誤った者は誰なのかを考察すべきである。これと共に、単純薬品の精査、それらの形や名前や力の知識、良いものと悪いものの、安全なもの粗悪なものとの区別を疎かにしてはならない。というのも、時折薬剤師が薬品を処方するが、金銭を得たいがために購入者を騙して、それが病人に効くか害するか、はたまた殺してしまうかを気にも留めないことがあるからである。医者が未知なる薬品を処方したら、購入者が〔薬剤師に〕その薬品を見せるよう命じて、病人に失敗が起こってその〔医者に責任が〕帰せられ、弁解を理解できない者に弁解することがないようにしなければならない。これは大きな分野である。もし私が見た過ちや驚きを説明すれば、それを述べるために文章が長くなるだろう。

「これらの状態の全てについて、医者はソフィストたちから遠ざかるように努め、彼らの論調や過ちや捏造から安全であるようにしなければならない。」<sup>(17)</sup>

「医者が自宅で、市場の民衆の間で、病人の家で、病院で遵守し、慣れて容易にして、自然な性質のものとなるようにすべき作法や原則には、〔次のものがある〕。自宅では我々が必要だと述べた学問の考察に専念し、それらを食べ物や飲み物や性交による快楽に優先させ、配慮せねばならないそれらの準備や選別や調整に配慮し、眼前の病人の状態をよく考え、彼らに処置しなければならないことを彼らのもとに行く前に考察し、彼らに行い処方することについて毎日責任をもたねばならない。自分が正しいと知れば、実行していることを実行し、その一部に誤りや不足があれば、それを訂正して適切なものを準備する。急ぎ不注意になって、適切でない場所に何かを置いてしまうべきではない。する必要があることをするのに怯えて出来なくなると、し損なったことを補うために、努めねばならないことを逸してはならない。食べ物や飲み物および肉欲に従うことを貪らず欲さず、その制御を失敗しない。〔その制御を〕無視しても、あるいは飲み食い誘う必然性や過剰な欲望のために失敗したとしても、そのために禁欲する必要も、その行いを非難される必要もない。とはいえ、私はこの言葉によって、それを許可するのではない。ある賢者は『王にとって圧政は恥すべきである。それはその王国と家臣の腐敗に繋がる。禁欲者にとって犯罪は恥すべきである。それは彼の現世と来世を駄目にする。医者にとって失敗は恥すべきである。それはその健康と学術を駄目にする』と言った。

「医者が健康を失えば、中傷や非難の言葉が投げられ、それらは〔次のような〕特徴を彼にもたらす。その理由を尋ねられたとき、彼は恥じて当惑する。医者が自身の健康を維持して病

<sup>(17)</sup> Ṣā'īd ibn al-Ḥasan, *al-Tašwīq al-ṭibbī*, ch. 4, 13a, l. 8–19a, l. 13.

気を排除できない場合、他人にそうすることは不可能であろうから、[人々の] 心が彼を避ける。彼の生活は悪化して、やり過ぎを引き起こすような不摂生と、罪を引き寄せるような欲望が神に呪われる。また、彼の力が弱まり、肌が裂け、身体が痩せ、欲望が少なくなり、顔色が黄色くなるほどに、そして人生の大半を最悪な状態で過ごした後でそれが慢性的の病気や破滅的な病気が生じる原因となるほどに過剰な摂生をすべきではない。歩き方は速くもなく遅くもなく、余所見が少なく、彼を認める者に愛嬌と挨拶を多くして、気が長く、吉報を告げ、笑顔を絶やさないべきである。」<sup>(18)</sup>

#### 医者吉報

「しかし、陽気や歓喜と言っても、門を叩き、病人に厚かましくなって、彼らに軽蔑され、評判を落とし、命令が従われなくなってしまうほどにならないように。怖れられ嫌われるほどに無骨で傲慢にならないように。むしろ、これら 2 つの状態の間にあるようにせよ。呼ばれるまで病人のもとに行かないように。というのも、[医者] は病人にとって偉大で、その家にとって高尚だからである。病人やその家族から僅かなものを差し出されたら、彼らに返さないように。病人のもとに入ったら、その顔が見える近くに座り、彼と向き合い、彼の言葉を聞き、問う必要があることを問うて聴くべきである。彼の世話をし彼のことを告げてくれる者の証言を聞き、様々な場所で彼について調査するまで、彼自身の言葉に満足しないように。というのも、病人の状態を告げる者は時折、躊躇し怖れるからである。そして、何かを隠している、あるいは使用した何かを黙っていたり忘れていたりする場合に、嘘をつくことがある。また時折、表現するのが下手なために、あるいは病気が隠れているために、病人は発見したことを上手く伝えることができないからである<sup>(19)</sup>。病人や近い人の側から医者に対して話における繰り返しや捏造が現れるか、医者が命じたことに対する誤解や違反が認められたら、[彼らから] 逃げるべきである。というのも、失敗が彼らにではなく、[医者に] 帰せられるからである。[病人の] もとに入った医者と、彼らが [病人に] 指示したことを調査し、正しいものと共に考察すべきである。勝利の願望のために、真理に属さないようにしてはならない。というのも、真正な人 (munṣif) とは、いかなる点においても真理が友である者だからである。研究と質問と検査が上手くいき、証拠や徴候によって病気が証明されるまで、何も病人に処方してはならない。そうしてから、助言と努力をしつつ、治療として極みにあると知っているものを処方するのである。病人の状況がそれに至らなければ、入手が簡単で価格が手頃だが、効用において必要なものと異なるものを探すべきである。病人には健勝の吉報をもたらす、可能な限りその魂を力づけるべきである。ただし、これに [病人が医者の] 命令を受け入れるという条件を付け加えよ。病人のもとに長居せず、必要がなく役に立たないことについて話さない。側に座ってゆっくりするよう求められたら、病人のために適切だと知っていることのためにだけ、座るよ

<sup>(18)</sup> Ṣā'id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, ch. 5, 19b, l. 9–21a, l. 11.

<sup>(19)</sup> サーイドの本文に従い、「yaṣbiru」を「yu'abbir」に修正して読む (Ṣā'id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, 21b, l. 14)。

うにすべきである。要するに、[病人を] 和らげることを求めるべきである<sup>(20)</sup>。というのも、それが人々の心における [医者] の位置にとって最も快適だからである。

「病人から離れているときは、彼の状態について、[治療を] 再開する際に処置せねばならないことについて、多く思考すべきである。破滅的な徴候が現れたために逃げたのであれば、非難を受けることはない。というのも、これは予後における [医者] の有能を示すことだからである。

「病院に行くこと、そこで働くこと、発見した病気の奇妙な点を研究することに献身すべきである。大抵の場合、このような場所で、聞いたことも文書で見たこともない、いや時折はそれが見つかることはあり得ないと思われるような病気を目撃することになる。しかし病気は、原因が複合的であるために多様で奇怪であったとしても、その種やその類は原則のうちに収まり、原理のうちに保存されている。これらの原理の何れかを見たら、その規則のうちに確立させて、自分や他人に役立つようにすべきである。

「病院に行くときは、適当であり自身を飾り立てる場所へ座り、静かに威厳をもって行き来すべきである。また、病人や [病人] の世話をする者が訴えることを親切に良く聞き、彼らに処方することを理解させるために教えよ。栄養物での治療が可能であれば、薬品を用いないようにし、薬品での治療が可能であれば、鉄 [刃物] を用いないようにせよ。[鉄を用いるのは] そうせざるを得ないときだけにせよ。あらゆる病人について、その状態と余裕に応じて処方し、[薬品の] 入手を容易にするように。手元に無い薬品を述べたり、知られていない名前や奇妙な名前を述べないように。彼らに怒らず、彼らから時折現れる醜いことを彼らに仕返したり、あるいは美しいことによって [彼らが] 返報できないようにしないように。というのも、ヒポクラテスが『助言』 (*al-Waṣāyā*) <sup>(21)</sup>で言っているからである。『病人の多くは我々が無視すべき人々である。特に、命じられたことを行わない者は。ただし、彼らの我々に対する行いの悪さのために彼らを責めるべきではないし、彼らから顔を背けるべきではない。特に彼らのうち状態の悪い者については。』

「これに続けて言う。『我々はこのような状態の者を罰して、適切ではないものを処方すべきではない。というのも、この者は医術について無知であり、それに適さないのだから<sup>(22)</sup>。むしろ、我々は彼らの治療を判断すべきであり、そうするに相応しいのである。病人を治療するための知識を神に賜り与えられていても、彼らに助言を与えず憐れまないほどに心が貧しい者は、あらゆる善から遠く、医学およびその民の模倣から離れている。』

「また [ヒポクラテスは] 言う。『この学術に身を捧げ、それへの接近を望む者には、[次のことを] 命じよう。憐れみと慈悲、同情と親切をもって病人を治療し、困難な状況でも彼らを

<sup>(20)</sup> サイドの本文に従い、「fal-yatūf」を「fal-yatūb」に修正して読む (Sā'id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, 22b, l. 6)。

<sup>(21)</sup> この文章は、ギリシア語で伝わる著作 *Testamentum/Qualem oportet esse discipulum* とも、アラビア語で伝わる断片とも一致しない。Ullmann, *Die Medizin*, 33 (no. 26); Ibn Abī Uṣaybi'a, *Uyūn al-anbā*, I, 26, ll. 14–26.

<sup>(22)</sup> サイドの本文に従い、「la-nā」を「la-hā」に修正して読む (Sā'id ibn al-Ḥasan, *al-Taṣwīq al-ṭibbī*, 23b, l. 14)。



無視せず、彼らに必要とされている時に見捨てず、全ての病人に慈悲深く、同情し親切にし、良く注意を払い、彼らへの処方箋を訂正し、彼らに役立つことについて努力する。彼らが貧乏であったとしても。というのも、そうすることで現世と来世における名誉を得て、賞賛されるようになるからである。貧乏で異邦の病人が現れたら、彼を治療し、処置を引き受け、可能であれば自分の財産を彼に費やすべきである。なぜなら、それが彼に必要なだからである。また、ここで〔医者に〕美德と高位がもたらされる。なぜなら、人々のうち彼らに慈悲深く同情している者は、医術の徒の一員であり、それと結びつき、それを好むからである。少ない知識の混沌に沈んでいる者はこのことを何も知らず、それを上手くできないため、医者と呼ばれるべきではない。この層の人々が適するのは彼らの領分にであり、彼らは復活においてそれによって罰せられないと思っている。私が彼らについて説明したことの中に、精通した医者にとっての利益がある。すなわち、彼らが悪く行い真理に背くとき、精通し批判的で見識ある医者は賞賛される。医者の名前をもつだけの無知な者と比べられるからである。』これは傑出したヒポクラテスの言葉の一節である。我々が先に〔述べた〕ことの正しさの証言として、我々はこれを伝えた。医者にとって不可欠で必要なことには、毒物や致死性の薬品を何も処方しないこと、それらを決して告げないこと、墮胎させる薬品を処方しないこと、利益を得られるか害を排除できること以外話さないことがある。それらの何れでも行えば、2つの世界において神に仕返しをされるだろう。あらゆる腐敗や陰謀から遠ざからねばならない。要するに、人々に見せて恥じないことだけを行い、話すように。また、病人の秘密を隠すように。というのも、多くの病気は医者がその患者以外に告げることが許されないからである。例えば、痔や子宮に関係する病気などである。」<sup>(23)</sup>

43 これらが、サーイド・イブン・ハサンが『医学への欲求の喚起』で述べた助言である。医者が知らねばならないと彼が述べていたこと〔の一部〕<sup>(24)</sup>が不可欠ではないということは明らかである。

#### イブン・フバルの助言

助言には、イブン・フバル (Ibn Hubal, 1213 年没) が『〔医学〕選集』(*al-Mukhtār[āt fī al-ṭibb]*) と呼ばれる書物——偉大な書物である——の冒頭の文章で語ったものがある。すなわち、「医学は学術の精髓であり、最も高貴な学問である。これは、その主題が人間の身体であり、その目的つまり健康の獲得が最も優れた人間の状態だからである。そのため、先人たる賢者たちは〔医学を〕保護し、他者から守護するように警戒した。ペルシア人やギリシア人の習慣では〔医者〕が子息たちに学術や学問を教えており、誰も父親の学術を越えることがなかった。これが学術の減退と学問の逸失を招いた。というのも、学がある優れて賢い者が、時折愚かで間抜けな子を産むこと、またその反対となることがあるからである。そして、備わっている者が妨げられ、苦労が無駄になる。プラトンの時代はこの習慣を否定し、禁止して、この行為を 1

<sup>(23)</sup> Sā'id ibn al-Ḥasan, *al-Tašwīq al-ṭibbī*, ch. 5, 21a, l. 11–25a, l. 14.

<sup>(24)</sup> 『注釈』写本に従い、「mā」の前に「ba'd」を挿入して読む。MS Istanbul, 2050, 260r, l. 28.

つの土地に1つの種を繰り返し「植える」ことに喩えた。というのも、これは駄目になり、無意味になるのである。

44

「アリストテレスはこの慣習を否定する〔書物を〕書いた<sup>(25)</sup>。曰く。『学問は相続人に与えるべきではない。相続人は獲得する苦勞をしておらず、それを〔獲得する〕原因を知らず、また〔それを〕保存する原因も知らない。必要なのは、学問や学術を、備えがあり素質がある者たちに与えるように置いておくことである。その本性が学術あるいは学問に向いている者は、それに携わる能力をもつ。先人たちのうちに、学術の主たちの姿や形を家の壁に描き、若者たちをそこへ入れ、それらを彼らの本性に見せた者がいた。そして、学術や学問をする者の姿や形を良く評価した者が、その学術や学問に携わった。』

「医術については、その高貴さとその危険の大きさのために、賢者たちはその弟子たちを人相学(firāsa)によって選別した。彼らは外見が良く、器官が釣り合っており、混質が平衡で、性格が純粋で、状態が一定で、理性が信頼される者を選んだ。教師たちはかつて自らの子息への教育に専念できていた機会を逸しないように、彼らを自らの子息のように、弟子たちは互いが兄弟であるように扱った。そして、それを他人から守護して保持し、叡智の基礎を遵守するという誓いや契りを彼らにさせた。そのため、彼がそれを学ぶのは、神のためにであり、素晴らしい神の報償を求めてであって、被造物からの見返りを求めてではないということになる。この学術はその王たちの教養と、高名な人々の美德に属しており、彼らは人生において必要となる宝や財産を必要としない。この学術は弱者たちや困窮する人々まで届いたので、収入に関する彼らの思惑が分散して学術が逸失し、その基礎が弱まらないように、彼らの糧をその学術の中に据えた。ただし、彼らは〔次のことを〕確かめた。〔自ら〕求めずに受け取る場合を除いて、病人に要求しないこと。富者たちから得られるものによって、弱者や薬品を入手できない者たちの治療を賄うこと。歓喜と喜びと親しみをもって病人に接すること。彼らのうちその処置の必要を満たせる者に献身し、また弱者のもとへ行き、貧者たちに傲慢にならず、度重なる病気のために疲弊しており傷や膿が多い者の治療を、汚いと思い見下して拒絶しないこと。薬品やその代わりとなる良く知られたものを述べる際には奇妙なことをせず、その優れた点を示して、それを明らかにすると報償があるようなことを隠さないこと。

「彼が願う学術の実践について助言を与え、その助言によって人類ではなく神へ近づくこと。『使者たちの小さな紙面』(Ṣaḥīfa al-safrā' al-ṣuḡhrā) で言われていることはなんと正しいだろう。『人間よ、汝の学術を人々の目から隠せ。彼には天のマラクートの冠からの目があり、彼を見ていて、賞罰を与える。』

「墮胎させるものを処方せず、子種を断って妊娠を妨げるものも処方しないこと。ただし、妊娠や出産の際に母親の破滅が危惧されるような重大なことがあって、それが要求される場合は別である。また、何らかの意図あるいは怒りのために毒物を与えたり、贈ったり、教えたり、学んだりしないこと。ただし、それらによって治癒されるかもしれない者を治療する状況では

<sup>(25)</sup> イブン・フバルの本文によれば、アレクサンドロスに宛てた書簡である。Ibn Hubal, *Kitāb al-Mukhtārāt*, I, 3, l. 13.

45 別である。同様に、秘密を守るという誓いを立てること。というのも、彼らは父親たちや子供たちが知らないような人々の状態を知るからである。また、常に慎み深く、目を伏せること。彼らが人々の家に入るときは、彼らの関心は病人に利益をもたらすものだけに向けられる。清潔にし、着飾り、香りを良くして、彼らと出会ったときに病人が安心できるようにすること。良い質問をして、[病人の] 心を楽にすること、また危険だと知られる病気に罹った病人が健勝の望みを失って、体力の減衰や希望の弱まりを早めないようにすること。[希望は] その背後、彼らが知らないことを御存知である神の側にあるのだから。人間の能力では、創造の全ての秘密および世界の優れた秩序の知識を知ることはできない。医者が希望を失ったまま病人のもとを離れて、そして再び戻ると、神が健康の扉を開いてくださっていること、また [医者が] 別の病人のもとを離れるが、その人に対する希望は彼の体力やその健康の復元への信頼より固いにもかかわらず、その後 [病人が] 亡くなるということが何と多いことか。

「師が語ったことは何と正しいことか。神が彼に慈悲深くありますように。

「真であれば繰り返し訪問することが有害ではなく、誤りであれば生きたまま無言で埋められる者になるような強情な考えの人によって、医者が病人を破滅に至らせることは許されない。

「このような助言や類似の善行を、彼らは学生たちが承認するよう願っている。また、彼らは相応しい学生たちに対してそれらを惜しまない。」<sup>(26)</sup>

本研究は JSPS 科研費 JP20K21920 の支援を受けたものである。

(東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 特任研究員／

Project Researcher, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics,  
Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo)

---

<sup>(26)</sup> Ibn Hubal, *Kitāb al-Mukhtārāt*, I, 3, l. 3–5, l. 13.